

私は帰って参りました。これこそ私の国

エスタ・ロウエル・ヒバド

中島和子

(女子大学名誉教授)

はじめに

同志社女子大学初代学長であり、宣教師であったエスタ・L・ヒバド先生は一九九九年二月四日、カリフォルニア州クレアモントのピルグリム・プレイスに於いて九十五年の生涯を終えられ、天に召された。ご遺言により、ご遺灰は二人の友人に抱かれて同志社に歸られた。四月二十四日、栄光館ファウラー・チャペルに於いて同志社女子大学召天記念礼拝が

行われ、三百名の参列者は先生のご遺徳を偲び、同志社に先生を遺わされた神の御愛に深い感謝を捧げた。

ご遺灰は若王子の同志社宣教師墓地と鳴滝の同志社教会墓地に埋葬。同志社を真中に挟み、東と西の小高い丘から、これからも私たちを見守り続けて下さることを思う。「先生、私たちの側で安らかにお眠り下さい」。これは薫陶を受けた者一同の願いである。

一、両親と子ども時代

エスタ・L・ヒバド (Esther L. Hibbard)

母は一九〇三年九月二三日、父カーライル・V・ヒバド (Carlisle V. Hibbard) と母スージー (Susie) の長女として東京に生れる。両親は共にウイスコンシン大学の出身で、二人とも学生時代、キリスト教学生会会長の経験者であった。父は学生の頃からモット博士の感化を受けてボランティア活動に参加していたが、卒業後はYMCAに属し、日本特派員として東京に在住していたのである。母の方は祖母がメソジスト派の婦人宣教師会の会長をしていたため、宣教の仕事に深い関心を寄せていて、父のよき理解者、協

力者であった。従って二人の間に生れたエスタには生れながらにして宣教に携わる素地が備わっていたといえよう。

両親はYMCAで英会話と聖書を教えながら日本語の勉強をしていたが、日露戦争が始まると父はYMCAから北滿に派遣され、日本軍に参加して天幕を設営したり、兵士の身の廻りの世話をした。彼の無私で忍耐強く、氣力溢れるキリスト者としての奉仕活動は高く評価され、多くの人から感謝された。

エスタは日露戦争をはじめとして、第二次世界大戦他の数々の戦争で激動する二十世紀を生き、苦難に遭遇しながら多くのことを学んだ。彼女の九十五年にわたるこの世の旅の舞台は非常に大きかった。エスタに生れながらに備えられた素地は、異文化間コミュニケーションの中で育まれて、美しく開花し、結実していくのであった。同志社に勤め、女子大学の学長に就任した時は、それまでの試練によって育った蕾が大きく開花した時であり、すべてが神の御計画の中にあっただのだと思われる。御計画の跡を更に辿ろう。

一九〇四年一二月、父が渡満すると母はエスタと共に弟ロウエル(Lowell)出産のために一時ウイスクンシンへ帰国。間もなく日本へ。家の近くの運動場に開かれた幼稚園に通う。バイリンガルの早期訓練も始まる。「梅檀は双葉より芳し」といわれているが、エスタは日、英両語を混ぜてべらべらしゃべり、両語とも上手に読めたし、推理力、記憶力共に優れ、しかも家事もよく手伝う女の子であった。彼女は夏、軽井沢の自然の中で暮すのを楽しみにしていた。特にお気に入り野草の名前当てであった。

一九〇八年、ヒバド一家は大連に住むことになる。学令期を迎えたエスタは裏庭に設けられた小学校で、日本人、アメリカ人、ロシア人の子どもと一緒にアメリカの教科書を使って勉強した。

一九一〇年、弟ロウエル死亡。間もなく下の弟ラッセル(Russell)が誕生。一九一三年、父腎臓結石のため、シベリア鉄道で帰米。十歳のエスタは帰途の旅で触れた世界各地の自然や文化に感動する。例えば民族衣裳や伝統工芸品、ロシア正教大聖堂の魂をゆさぶるような音

楽、礼拝堂の神秘的な雰囲気。それに英国湖水地方の雄大な景色。また、英国英語と米国英語の表現の違いにも驚く。

二、ハイスクールから大学へ

一九一四年、ウイスクンシン州にある母方の祖父母の家に落着き、ヘイステイニング・ハイスクールに入學。エスタはアメリカ人の生徒のことがよく理解できない。遊び方もわからない。世界を旅しているも、合衆国の地理がわからない。東洋にいる時のように白人だからといって特別扱いしてもらえない。などということとで大きなカルチャー・ショックを受ける。しかし、夏になってロッキ川(Loch)の自然の中で遊び、くつろぐことはとても楽しかった。

一九一五年、父は第一次世界大戦中のヨーロッパへ派遣され、捕虜收容所にいる軍人や賜暇休暇中の兵士のためにレクリエーション施設の設置などに携わった。

ハイスクールの思い出は少ないが、卒業時、大学で毎年千ドルの奨学金を受けて学ぶことができる特典が与えられてマ



ウント・ホリヨーク大学へ入学。この大学では創立者メリー・ライオンのキリスト者としての人格に感化を受けたり、近くの教会のクリスマス・キャロルの美しさに圧倒され、自分も聖歌隊に入って活動するなど、心豊かな日々を送り、優等で卒業した。

三、教職を求めて同志社へ

大学を卒業した時も、ウイスコンシン大学大学院を修了した時もアメリカは不景気のどん底であったため教員採用状況も思わしくなく、「社会に役立つことでもないのなら自殺してしまいたい」と思う程絶望していたが、希望は失望に終る

ことなく、やがてマデイソンの一流校セントラル・ハイスクールに就職が決った。しかし、英語（ここでは母国語）を教えるても、人間一人一人と個人的に話す機会もない生活は無味乾燥で耐え難くなった。その頃、教会で、賜暇のため帰米中の宣教師から、中国で英語を教えている生徒が非常に熱心である、という話を聞いた。ヒバドは自分が生れ育った日本で宣教師として教育に携わることを決意し、アメリカンボード外国伝道局へ志願書を提出した。

彼女の熱き祈りは聞き届けられ、同志社との関係が始まったのである。最初はミッションスクールである神戸女学院を希望していたが、同志社が日本人によって設立された最初のキリスト教主義の学校であり、アメリカ人はよきパートナーとして働いていることを知ると、「まさにそこに遣わされたのは神の御心であった」と感謝した。一九二九年、念願叶って横浜港に着いた時の彼女のことばには溢れんばかりのよるこびが込められている。「私は帰って参りました。これこそ私の国」。

こうして三年契約で同志社女学校の英語の教師となる。住居は同志社宣教師住宅で、一緒に住んでいた同志社宣教師ミ

スクラップ (Frances B. Clapp) とミスグウィン (Alice Gwinn) の名前を合わせて「クラブドイン (Clappard Inn)」と名付けられたのは有名である。ヒバドは豊富な経験と神から与えられたタラントを生かして、神戸女学院と同志社女専の学生の合同キャンプ指導者の訓練をしたり、YWCAの聖劇の指導なども行った。また、日本語や日本文化に親しみ、日本人との交流を深めた。寂光院の小松智光尼(現在門主)とは終生の友情を結び、戦後、この二人の若い女性が共同でマッカーサー元帥に、「仏典に『時を同じくしてこの地上に生を受けたる者は全て兄弟姉妹であるから、仲良く平和に暮らして行くべきである』とあります。どうか日本国民を兄弟姉妹であると思って戦後の政治の指導をして下さい。私は真に平和を願ひ、戦争のない世の中を願っています。……」と進言した(原文小松、英訳ヒバド)。これに対してマッカーサーから慇懃丁寧な正式の礼状がきたそう

で、その手紙はヴァージニア州のマッカーサー・ライブラリーに保管されているということである(芳賀順子氏談)。

一九三三年にはアメリカン・ボードの終身宣教師に任命され、同志社女子専門学校で英語・英文学の教師となる。ヒバドの学者、教育者としての最初の功績は山中ソフィ氏と共著で英文学アンソロジー『*Readings from English Prose and Poets*』を出版したことで、東京大学の市河三喜博士などからも高い評価を受けた。訳読方式の授業から脱却して、作品そのものの内容を英語で理解し、詩であれば情感を感じとるように配慮された教科書であった。「同志社女専の卒業生に英語を習うとどこか違う」と世間で評価されてきたのは、この教科書による教育に負うところが大きいといえる。

満州事変、支那事変と日本は次第に軍国主義化していく時代で、遂に一九四一年三月九日、同志社に於いてもデントンを除く宣教師全員が引き揚げざるを得なくなつた。ヒバドは「私の生涯で一番悲しい時であった。……波止場から日本の友達が私に向つて手を振つた時、私には

この世の終りが来たと思えた」と記している。

太平洋戦争中、ヒバドはミシガン大学に通い、博士論文『*Ulysses Motif in Japanese Literature*』を提出して文学博士号を取得した。また同大学で陸軍特別訓練計画(ASTP)によって日本語を教えた。軍人に敵国語としての日本語の訓練をすることには躊躇したが、戦争が終つて平和が訪れた時、コミュニケーションがスムーズに行えるようにとの願いをこめて教えたらしい。

四、新制同志社女子大学の発足

一九四五年、太平洋戦争が終結すると、同志社の要請を受けてヒバドは同志社女専の教授に復帰。学制改革が行われた時、三年制の女子専門学校の取扱いが大きな問題となつた。与えられた選択肢は三つ。一、短期大学にする。二、同志社大学に吸収される。三、同志社大学と性格の異なる四年制のリベラルアーツ・カレッジに昇格する。女専の教授会は三番目を選択した。彼女は「どんなに困難を伴うものであるか、わからないままに」と述懐

している。カリキュラム委員長に選ばれたヒバドは同志社大学のグラント教授の協力を得て日本では類を見ない、ユニークなりベラルアーツ・カレッジの構想を立てたが、認可されるまでには並々ならぬ苦労があった。「ヒバード先生が女子大学設置準備委員長、つづいて初代学長でなかったなら、現在の女子大学は存在しなかった」と瀧山徳三第三代女子大学長が学報『しばぐさ』七号で述べているように、同志社の女子教育におけるヒバドの存在は偉大であった。彼女を豊かに育み導かれた神の御計画によって、ヒバドは一九四九年四月二二日、新制同志社女子大学 (Doshisha Women's College of Liberal Arts) の初代学長に就任し、大学の運営と教育に全力を盡した。

カリキュラムには非常にユニークな「人間関係」が「聖書」と共に設置されていた。二十一世紀を前にして、日本の教育は行き詰っている。学級崩壊、登校拒否、いじめなど多くのものは家庭や社会における対人関係に問題があるようである。ヒバドは半世紀も前にリベラルアーツ・カレッジにおいては人間の関係、人

間が共に生きることに関わる根本的な問題を重視し、講義と小クラスによる討論の両面から学ぶことができるようなカリキュラムを考えた。またエキストラ・カリキュラム(課外)でも具体化させた。礼拝、修養会、キャンプ、学生会活動などに於いて、一人一人に与えられているタラントを他の人のために使い奉仕するというボランティア精神が養われた。キャンプでは早朝のメディテーションの時に湖を前に一人静かに聖書を読み、祈っ



キャンプでのメディテーション

ておられるお姿は自然の中に融合され、あたりには神秘的な雰囲気漂っていた。一人になって神と対話し、本来の自分に立ち帰って、また皆の中に戻り、仕合う。対人関係の原点を自ら示して下さったのではないかと思われる。今、他大で、社会で「人間関係」の重要性が強調され出したが、運営上の困難から本学ではカリキュラムから消えてしまった。課外他に残っているこの精神がいつまでも大切にされることを願って止まない。

ASTPの経験を生かして、ヒバドはLanguage Laboratoryを使った英語教育を推進し、英文学偏重から、言語コミユニケーション、英米文化なども含んだ英語英文学科のカリキュラム改善への基礎を築いた人でもあった。シェイクスピア劇の上演のためのトレーニングや教授陣による劇の指導にも貢献した。

五. 学んで楽し、教えて楽し

ヒバドは六十五歳で本学を定年退職し、東北学院大学の教授となる。七十歳で定年になると隠退宣教師ホーム「ピルグリム・プレイス」に永住。彼女には深

い学識と高潔な人格、同志社および日本の社会、特に女子教育ならびに教育全体の向上への貢献に対して勲三等瑞宝章、同志社大学名誉文化博士号、同志社女子大学名誉文化博士第一号が授与された。

子供時代からずっと学ぶことが好きで、九十歳を過ぎてからもピルグリム・ブレイスの近くの神学校で聴講したり、目が悪くなってもテープ教材で楽しく学び続けた。ユーモアたっぷり「私はウサギで二千匹も子供を産みました。その子(教え子)が育っていくのが何よりの楽しみです」(山崎舜平氏追悼の言葉から)といわれたヒバドは教えることも好きだった。大学や教会のみでなく、学外でも聖書研究や女性の自立・向上を促す講演や指導、個人的な相談や援助に時を惜しまなかった。

このような恩師に出会えた恵みに心から感謝したい。

私たちが翻訳した『エスタ・L・ヒバド自伝―ある宣教師の思い出』(同志社女子大学、同志社同窓会発行 一九九九年四月二四日)を参考にさせていただいたことを記しておきたい。

エスタ・ロウエル・ヒバド先生略歴 (Esther Lowell Hibbard)

- 1903 (明治36)年 9月23日 東京で生れる
- 1914 (大正3)年 帰米。ウィスコンシン州の母方の祖父母の家に居住。その後ニューヨーク州ヘイステイングスに移る
- 1924 (大正13)年 マウント・ホリヨーク大学を優等で卒業
- 1926 (大正15)年 ウィスコンシン大学で修士号を取得。マディソンのセントラル・ハイスクールに英語教師として就任
- 1929 (昭和4)年 アメリカン・ボードの外国伝道局の募集に応じ、3年契約の伝道師として同志社女学校で教える
- 1933 (昭和8)年 4月 正式にアメリカン・ボードの宣教師に任命され、同志社女子専門学校教授として着任。英語・英文学を講ずる
- 1941 (昭和16)年 4月 日米情勢の悪化にともない、離日
- 1944 (昭和19)年 5月 シカゴのノースウエスタン大学に日本文化の講師として就任
6月 学位論文“The Ulysses Motif in Japanese Literature”(日本文学におけるユリシースのテーマについて―百合若伝説の起源と発達の研究―)により、ミシガン大学より文学博士号を取得
- 1946 (昭和21)年 10月 同志社からの招聘に応じ来日。同志社女子専門学校教授に復帰
- 1948 (昭和23)年 学制改革により女子専門学校の新制女子大学への昇格を実現させるため、カリキュラム委員長としてその準備に尽力
- 1949 (昭和24)年 4月 リベラルアーツ・カレッジとしての新制同志社女子大学の発足とともに初代学長に就任
- 1953 (昭和28)年 1月 京都日本語学校長に就任
- 1954 (昭和29)年 神戸学院の理事に就任 (1968年まで在任)
- 1960 (昭和35)年 『ジャパン・クリスチャン・クォーターリ』編集長に就任 (1964年まで在任)
- 1963 (昭和38)年 同志社大学平石善司教授の協力を得て、日本思想史上最初のキリスト教批判書である『破題字子』を英訳 (“Refutation of Deus by Fabian”)
- 1968 (昭和43)年 3月 同志社女子大学を退職。名誉教授の称号を授与される
10月 東北学院大学英文学科教授に就任
- 1973 (昭和48)年 11月 日本における教育上の功績に対し、勲三等瑞宝章を授与される
- 1975 (昭和50)年 11月 同志社創立100周年にあたり、同志社大学名誉文化博士号を授与される
- 1997 (平成9)年 7月 同志社女子大学名誉文化博士号 (第一号) を授与される
- 1999 (平成11)年 2月4日 95歳で永眠。